

考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（1）

－通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介－

古墳時代研究プロジェクトチーム

はじめに

神奈川県立埋蔵文化財センターには、神奈川県における考古学の偉大な先駆者、故赤星直忠博士が寄贈された膨大な量のいわゆる「赤星ノート」が所蔵されている。これは氏が大正末年から逝去された平成3年までに書き綴った神奈川県内の遺跡の踏査記録等を中心とした個人的な備忘録である。その市町村別の目録については平成8年から平成11年にかけて刊行された、神奈川県立埋蔵文化財センター年報14～18に掲載されている。しかしながらこれはあくまでも目録であって、その内容が詳細に紹介されているわけではない。踏査記録には正式な報告が成されないまま湮滅し、このノートでしか内容を知ることができない貴重な情報が数多く含まれている。

そこで当プロジェクトとしては、この貴重な「赤星ノート」に記載された古墳時代の情報についてその概要を公開し、記載内容についての今日的な視野でのコメントも併せて掲載することを計画した。このことにより赤星博士の地道な業績が改めて評価され、神奈川県の古墳時代研究の進展に多少なりとも寄与できれば幸いである。

例　　言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県立埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・研究紀要第9号には横浜市域にあたる01001・01011・01030・01032・01104番を掲載している。
- ・番号は埋蔵文化財センター年報14～18に記載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は01030・01032番：上田　薰、01011番：植山英史、01104番：谷　正秋、01001番：柏木善治が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1. の細目は【調査（踏査）年月】【資料保管場所】【記載内容概略】とし、2. は【（遺跡及び）遺物（遺構）概要】【掲載図書】【掲載図書概略】【小結】などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- ・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。
- ・本稿に掲載した赤星直忠資料は全て神奈川県教育委員会所蔵である。
- ・個人情報保護の観点から、個人名・個人の住所などはマスキングして掲載している。

年報番号 01001 伝保土ヶ谷区出土頭椎大刀 横浜市保土ヶ谷区

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月] 昭和52年9月4日・昭和52年9月8日・昭和52年10月8日のつごう3回、福島県の穴沢氏との封書のやりとり有り（日付は穴沢氏→赤星氏への手紙）

[資料保管場所] 会津若松市 [] 氏蔵（昭和52年現在）

[記載内容概略] 穴沢氏の封書のみ存在。昭和52年9月4日付けの封書：近所の眼科医で刀剣の研究家（会津若松市 [] 氏？）が入手し、紹介。保土ヶ谷区から出たもので柄頭を失っているが、頭椎大刀であることは確実。昭和52年9月8日付けの封書：写真送付、柄頭は遺存せず、後補の木製のものが挿入されている。茎には目釘があり、把の穴と相応するが、銹により挿入不可。菊座状の打込文が珍しい。昭和52年10月8日付けの封書：把（菊座状打込文）の拡大写真送付。

2. 記載資料の整理

[遺物概要] 頭椎とされる大刀は伝保土ヶ谷区とされるのみで、出土地などの大刀以外の情報がないものである。資料化も図録に掲載された限りであり、大刀に関する詳細は不明と言わざるをえない。

実測図からの各数値であるが、残存長は76.5cm、刃長は約66.8cm、刃部幅は約2.8cmを測る。目釘穴は尻側に1ヶ所存在し、把の飾り金具は金銅装で菊座状打込文（下辺が合わせ目）があしらわれ、その長さは10.5cmである。鍔は金銅装の倒卵形で、六窓の透かしを持ち、長径は約6.7cmである。鍔も金銅装で、長さ1.7cm、幅2.8cmを測り、筒金も金銅装で鍔に密接するものと、切先からおよそ14.5cmのところに筒金縁金具と密接して、つごう2単位が遺存する。いずれも長さは約6.0cm、幅は約3.5cmを測る。筒金縁金具も金銅装で筒金に密接して2単位が存在する。外径は関側のもので約3.5cm、鞘尻側のもので約3.4cmを測る。責金具は不明瞭ながら金銅装とみられるものが2単位存在し、いずれも外径は約3.3cmを測る。筒金と責金具の正確な位置は刀身に残った二つを除き分明ではないとの注釈がされる。鞘尻金具も金銅装で端部は円くおさめられ、内部には鞘の木質が遺存する。長さは約12.7cm、幅3.0cm、厚さ1.8cmで、身厚は1.0mmを測る。また、鞘尻金具は切先から約4cm程度挿入可能との注釈がある。把頭にかかる、切羽や縁金などの装具は遺存しておらず不明である。

県内における古墳時代の大刀で、その拵えを含めた全体像の推察が可能なものは、そのほとんどが装飾大刀に限られるが、数量的にはとても少ないものである。頭椎大刀は県内で出土している装飾大刀のなかでも数的に少なく、横浜市西区出土や、川崎市加瀬台4号墳（了源寺古墳？）として伝えられるものなどが挙げられるが詳細不明なものが多い。この伝保土ヶ谷区出土の大刀も柄頭は後補の木製のものが装着されているため、本来の柄頭が何であったのか再考も必要であろう。筒金も県内での出土は少なく、河南沢1号墓の圭頭大刀、塚田2号墳の環頭大刀、久野諫訪の原2号墳（断片）、坪面古墳（袋頭：詳細不明）、東方1号墓の円頭大刀などに限られる。金銅装で打込みによる柄の飾り金具が遺存している資料は、久野諫訪の原2号墳や川名新林右西斜面2号墓などで出土しているが、唐草文もしくは唐草状の打込であり、菊座状のものは珍しい。

[掲載図書] 福島県立博物館1988『日本刀の起源展—直刀から弯刀へ—』福島県立博物館展示図録

[掲載図書概略] 写真の掲載のみ。キャプションとして頭椎大刀外装（神奈川県横浜市保土ヶ谷区出土／7世紀／全長93.5cm）とあるのみ。

（柏木）

※ 大刀実測図掲載にあたっては穴沢啄光氏の了承並びに協力を頂きました。記して感謝いたします。

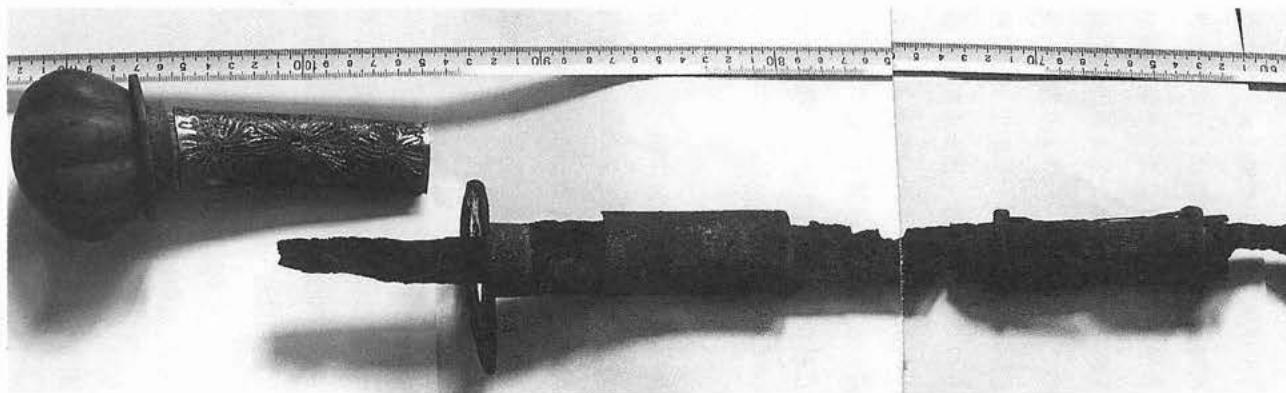
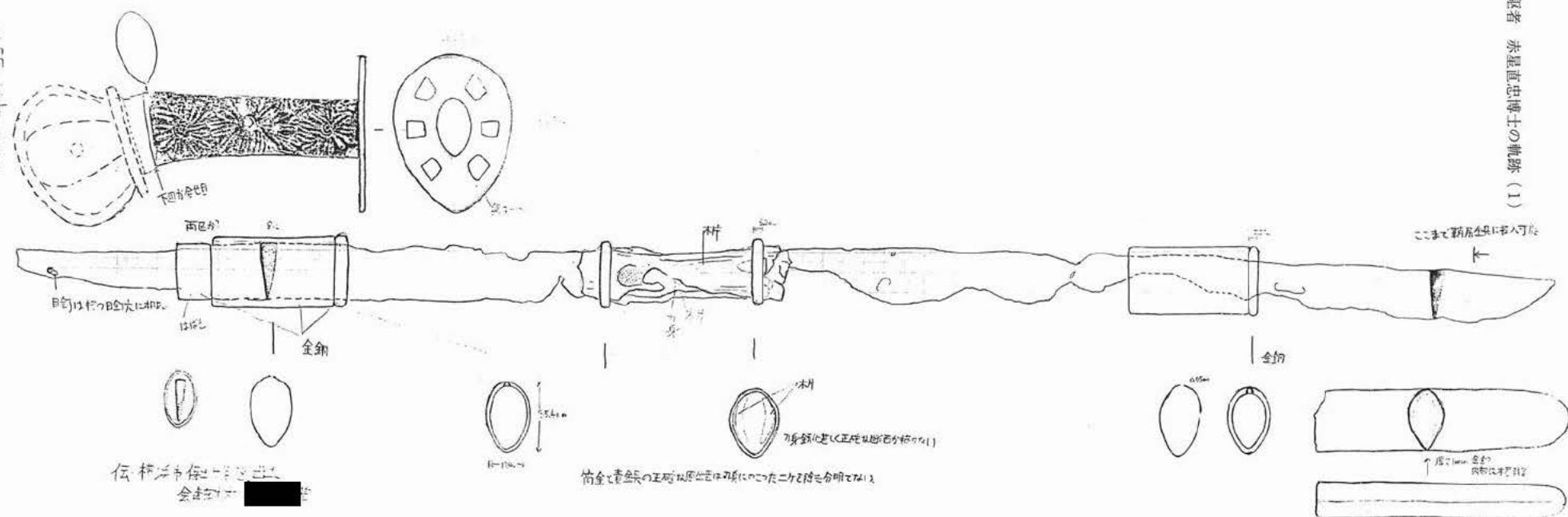


写真1 昭和52年9月8日郵送の大刀写真



写真2 昭和52年10月8日郵送の菊座状打込文



第1図 昭和52年9月4日郵送の実測図（穴沢味光氏実測）〔※S = 1/3〕

年報番号 01011 岩瀬山横穴群（駒岡横穴、ひょうたん山横穴） 横浜市鶴見区駒岡1585

1. 赤星ノートの内容

【調査（踏査）年月】本資料の記載の一部は昭和52（1977）年に神奈川県立博物館で行われた「100軒の仏像を見る—神奈川の彫刻—」開催案内・記事掲載依頼の裏、及び県史作成用に作られた集成カード神奈川県内主要遺物調査票 県史考古資料Bに記載されている。

【資料保管場所】国立東京博物館、三殿台考古館、[]（県史作成時）

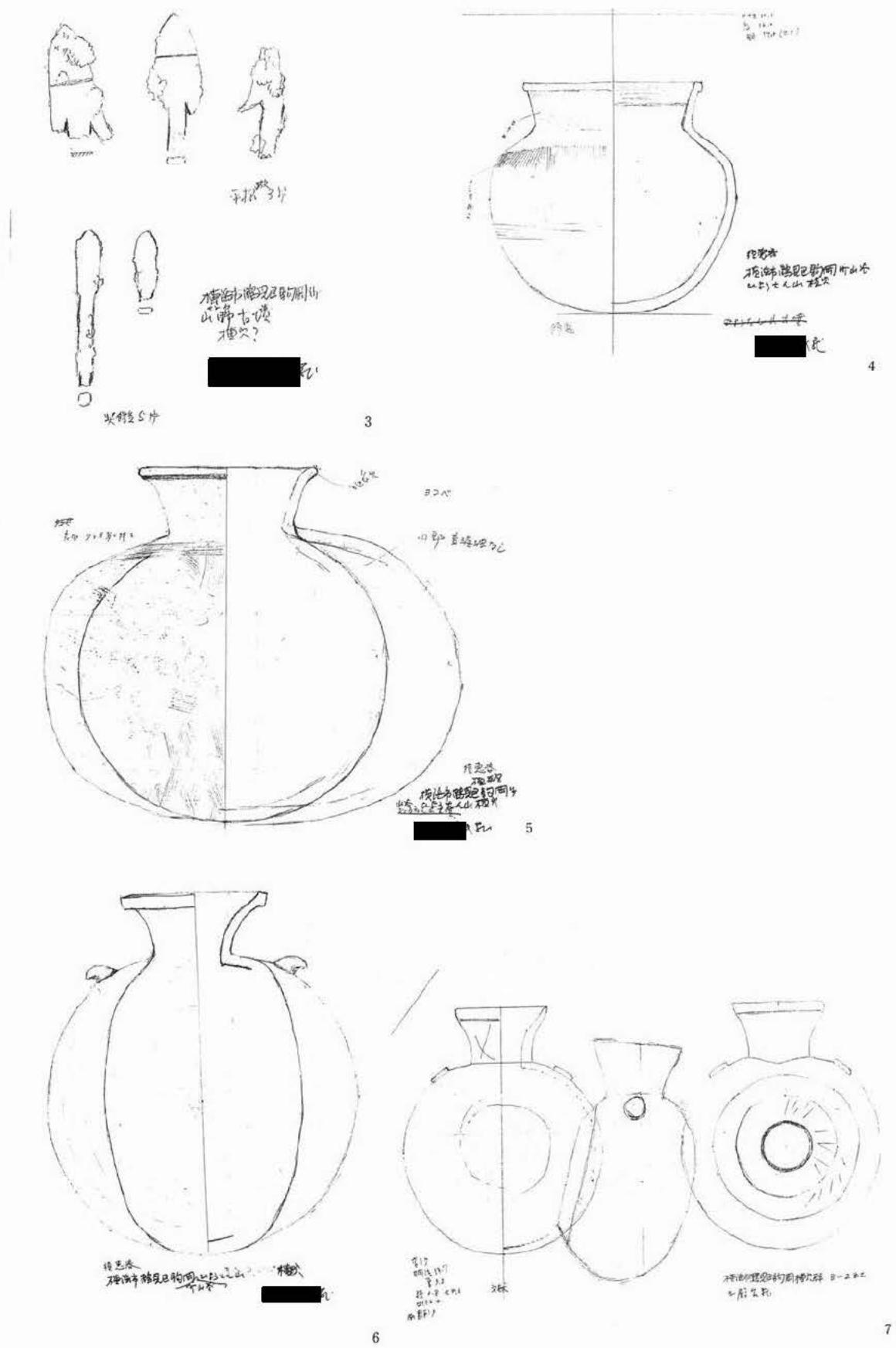
【記載内容概略】本資料はA・8枚の遺物実測図、略図、B・5枚の写真、C・1枚の集成カードの計14枚の資料からなる。

A・遺物実測図・略図 略図は2枚あり、いずれも子持勾玉の略図（①・②）である。「駒岡横穴、子持勾玉、[]氏、滑石製一寸五分五厘・国立博物館蔵、[]氏明治35年3月25日献納」の記述はほぼ両者とも同じで、片方には「[]氏」、「記録には石劍頭と記す由」とのメモがある。実測図は6枚（③～⑧）で③鉄鎌図5本が書かれたものには「横浜市鶴見区駒岡町 山野古墳 横穴」「平根鎌3片 尖根鎌5片」等の記載がみえる。④は須恵器短頸壺実測図で計測値や調整技法の他に「横浜市鶴見区駒岡町山野ひょうたん山横穴」の記載があり「ひょうたん山古墳」の記載を横線で消している。その他に「[]氏」の名前が書かれている。⑤は須恵器横瓶の実測図で、調整技法の他に④とまったく同様の「・・・ひょうたん山横穴」、「ひょうたん山古墳（消し）」の記述が見られる。⑥は須恵器提瓶の実測図で、同様に「・・・ひょうたん山横穴」の記述がある。⑦も須恵器提瓶の実測図で計測値の他に「横浜市鶴見区駒岡横穴群B-2出土 三殿台蔵」の記述がある。⑧は⑦と同一個体の実測図に拓本が貼り付けてあるもので、7と同様「横浜市鶴見区駒岡横穴群B-2出土 三殿台蔵」と記されている。写真は計5枚で⑨完形の銅釧2点⑩玉類で勾玉3点、小玉11点（紐通し）、管玉2点（紐通し）⑪馬具・引手2点⑫馬具・環状鏡板⑬馬具・環状鏡板（⑫の裏面と思われる）である。集成カードは一枚で⑭本遺跡の調査報告である「考古界8-6」（明治42年）の概要が記されている。赤星氏のオリジナルの所見等の書き込みは見あたらない。

2. 記載資料の整理

【遺物概要】実測図の考察①②の子持勾玉は同一遺物を扱ったものと思われ、記載内容もほぼ同一、②の方が丁寧に記されているが①では記載内容の整理がされており、①を元に②を作成したと推定される。③鉄鎌実測図 平根系鎌は2本が短茎柳葉腸抉鎌で、残る1本は残存部が僅かだが同様の形式と思われる。尖根系は長頸柳葉鎌2本である。④須恵器・短頸壺実測図 頸部～口辺の外反は小さく口縁端部は肥厚する。胴部は球形に近く肩部で内湾し、最大径は肩部下にある。底部は丸底。肩部に縦目のクシ目、中位下にカキ目と思われる調整が描かれる。⑤須恵器・横瓶実測図 口頸部は外反し端部下端に稜を持つ。端部は肥厚する。胴部は俵状を呈するが実測図計測で胴部最大径（長）28.5cm、器高24.3cmと胴張は比較的小さい。表面に不規則なクシ目が描かれている。⑥須恵器・提瓶実測図 口頸部は中位より強く外反し口縁部は肥厚し端部は面を持つ。胴部は扁平な球体で肩部に退化した鍵状の把手が対に付く。⑦⑧須恵器・提瓶実測図 口頸部は基部は僅かに外彎して立ち上がり中位で外反した後、端部はほぼ垂直に立ち上がる。端部は丸く仕上げられる。体部は扁平な球体を呈し、クシと思われる3条の同心円（回転）文内に放射状の調整を施す。頸部に「×」状のヘラ記号を持つ。肩部に把手の退化したボタン状の把手が対に付く。

【掲載図書】『神奈川県史20 考古資料』 古墳時代・古代図版719（図1～4）、概要210



第2図 岩瀬山横穴墓出土遺物（番号は本文記載○数字に対応）[3 : S = 1/3 4 ~ 7 : 1/4]

[掲載図書概略] 本資料は概要で「岩瀬山横穴群」として紹介されている。岩瀬山横穴群は明治40年に坪井正五郎によって、本横穴群の所在する丘陵上にある駒岡山古墳(駒岡古墳・ひょうたん山古墳)と同時に調査され、上記に見られる考古界8-6(明治42年)に報告がなされている。概要には当時ひょうたん山保存会が出来て、同会作成の出土品の色刷石版画が売られたことが記されている(第3図・齊藤忠編著「日本考古学史資料集成3 明治時代2」吉川弘文館)。今回扱った赤星ノートにはこの版画についての記載はない。横穴墓の形態については古いものと新しいものがあるとだけ記載されている。

図版は実測図④～⑧の4点の写真が掲載されており、④～⑥は_____氏、⑦＝⑧は三殿台考古館蔵とされている。なお、県史では図版は本横穴群出土遺物のキャプションが「駒岡古墳出土」となっており、概要文中にある図版番号と齟齬が生じているが、赤星ノートの記載から概要文の「岩瀬山横穴群」が正しいと考えられる。

[小結] 本資料に記載の見える遺構名は「横浜駒岡横穴・群」「横浜山野古墳・横穴」「横浜駒岡ひょうたん山横穴(古墳←消し)」である。「駒岡横穴・群」とされているものは略図①＝②の子持勾玉(駒岡横穴)1点と実測図⑦＝⑧の提瓶2点である。B-2出土とされる提瓶の特徴は須恵器編年でTK43に該当するとと思われ、従来の年代観では6世紀後半～末のものと思われる。「山野古墳・横穴」と記されているものは実測図③の鉄鎌で短茎柳葉が3点、長頸柳葉が5点と記されている。記述に基づくと短頸鎌の占める割合が一般的な横穴墓出土のものより多く、その形態からも西暦600年以前のものである可能性が強い。「ひょうたん山横穴」と記されているものは実測図④⑤⑥の須恵器・短頸壺、横瓶、提瓶である。⑥の提瓶の年代はMT85(～TK43)、6世紀第三四半期にあたると思われる。以上、遺物は横浜市北部の当該地域では、6世紀後半以降の横穴式石室を有する古墳から出土するものと類似し、横穴墓との比較では横浜市熊ヶ谷横穴墓群や市ヶ尾横穴墓群などと並び、現在判明している中では横穴墓から出土する須恵器としては早い段階が与えられるがその中でも時期差があると思われる。

(植山)



第3図 駒岡瓢箪山横穴出土遺物

年報番号 01030 横浜新羽横穴 横浜市港北区新羽町1388

1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月] 昭和39年7月20日に、当時神奈川県教育委員会社会教育課の職員で埋蔵文化財を担当していた[]氏が実見した、横浜市港北区新羽町[]番地付近で発見された横穴墓に関する聞き書きのメモ。

[記載内容概略] B5大の藁半紙に、ボールペンで簡単なメモと略図が記載されている。内容は、宅地造成により横穴墓が破壊された。今は存在しないがかつて付近に横穴墓4基が存在し、今回はその左側で新たに発見された。凝灰岩を掘り込んで構築されており、シジミ、アサリ、その他の貝が床上に10cm程の厚さで敷かれていた。遺物は発見されなかったが、保存状態が良好な人骨を確認。

2. 記載資料の整理

[遺構概要] 赤星氏本人が実見したのではなく、簡単な聞き書きのメモ。したがって、その内容の信憑性については若干疑問もある。

略図によると、横穴墓の内部構造は玄室と羨道の区分のないタイプで、奥壁に接して棺座が設けられている。棺座の手前には壁障が認められる。前庭部が存在したか否かは不明。

貝床を有する横穴墓は神奈川県内では極めて珍しいが、10cmもの厚さに敷かれたものとなると類例を知らない。貝が横穴墓の内部全体に敷かれていたか否かは不明であるが、おそらく棺座上のみに敷かれていたのであろう。なお、60cmもの高さを有する棺座はこの地域周辺では珍しい。ちなみに、本横穴墓の2.5km程西に位置する都筑区東方町の東方横穴墓群では21基の横穴墓が調査されているが、これだけの高さの棺座を有する横穴墓は1基も存在しない。

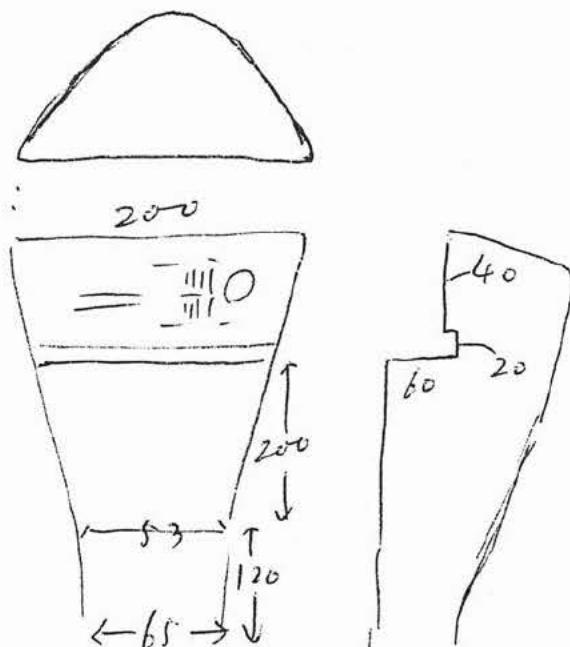
全長3.8m、最大幅2m、最大高は不明。

全体の形状から7世紀中頃の所産と推察される。

遺跡のすぐ南には鶴見川が流れ、周辺地域は比較的横穴墓の分布が密なことで知られる。新羽町[]番地を明細地図で確認すると、南西向きの崖面であったことが判る。『神奈川県遺跡分布図』並びに『神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳』には登録されていない。

[掲載図書] なし

(上田)



第4図 新羽横穴玄室平断面概略図

年報番号 01032 緑区恩田町苗万坂横穴 横浜市緑区（現在は青葉区）恩田町2296付近

1. 赤星ノートの内容

【調査（踏査）年月】昭和47年7月5日に、横浜市の依頼により係員と現地に同行し確認した横穴墓群の踏査記録。

【記載内容概略】当日現地で書いたと思われる走り書きと、それを神奈川県立博物館のA4サイズの原稿用紙に清書したもののが存在する。その他、緑区（現在は青葉区）奈良町で発見された熊ヶ谷横穴墓群の昭和47年6月2日付新聞のコピー及び、同横穴墓内的人物様の線刻画を観察する昭和47年6月16日付の赤星氏の写真四葉が存在する。

走り書きには、横浜市域緑区恩田町苗万坂横穴・鉄町宗英寺横穴遺跡の位置図及び側面図及び実見した5基の横穴墓の平断面概略図、さらには鉄町宗英寺付近に所在する横穴墓のごく簡単な平断面概略図と、宗英寺の石灯籠・庚申塔のスケッチが記載されている。清書には、横浜市緑区恩田町苗万坂横穴群測図との表題があり、5基の横穴墓の平断面概略図と所見が簡易に記されている。清書には走り書きに記されていないことも書かれており、記憶の定かなうちに頭の中で整理し記載したことが解り、赤星氏の考古学に対する真摯な人柄が偲ばれる。

2. 記載資料の整理

【遺構概要】6基の横穴墓を実見したようであるが、図化されているのは5基である。向かって右から番号を付けたようである。

No.1は、後世の改変が著しい。奥壁に接して棺座が存在するようにみえるが、玄室手前が風呂場に利用され切り取られたと記載されている。奥壁下方に丹少々残との記載もあり。玄室と羨道の区分のない終末期の横穴墓と考えられる。

No.2は、入口部を欠くが遺存状態は良好だったようである。玄室と羨道の区分が残り、奥壁に接して棺座が存在し、側壁には鍬目が残るとの記載がある。天井、奥、側壁に丹塗りよく残るとの記載もあり。図によれば棺座左右に排水溝が掘られていたようであり、また右側壁付近に若干の礫が存在したことがうかがえる。

No.3は、No.2とほぼ同様の形状であるが棺座奥行きが狭い。側壁に新旧不明の線刻があり、天井及び側壁に丹塗りが少し残ると記載されている。棺座上右側壁寄りに若干の礫が存在したようである。

No.4は、玄室と羨道の区分が明瞭でなく、棺座が認められないタイプの横穴墓で、側壁にやや細い肋状の削痕が残り、左側壁奥には礫が存在したようである。左側壁と右奥に丹が残ると記載されている。

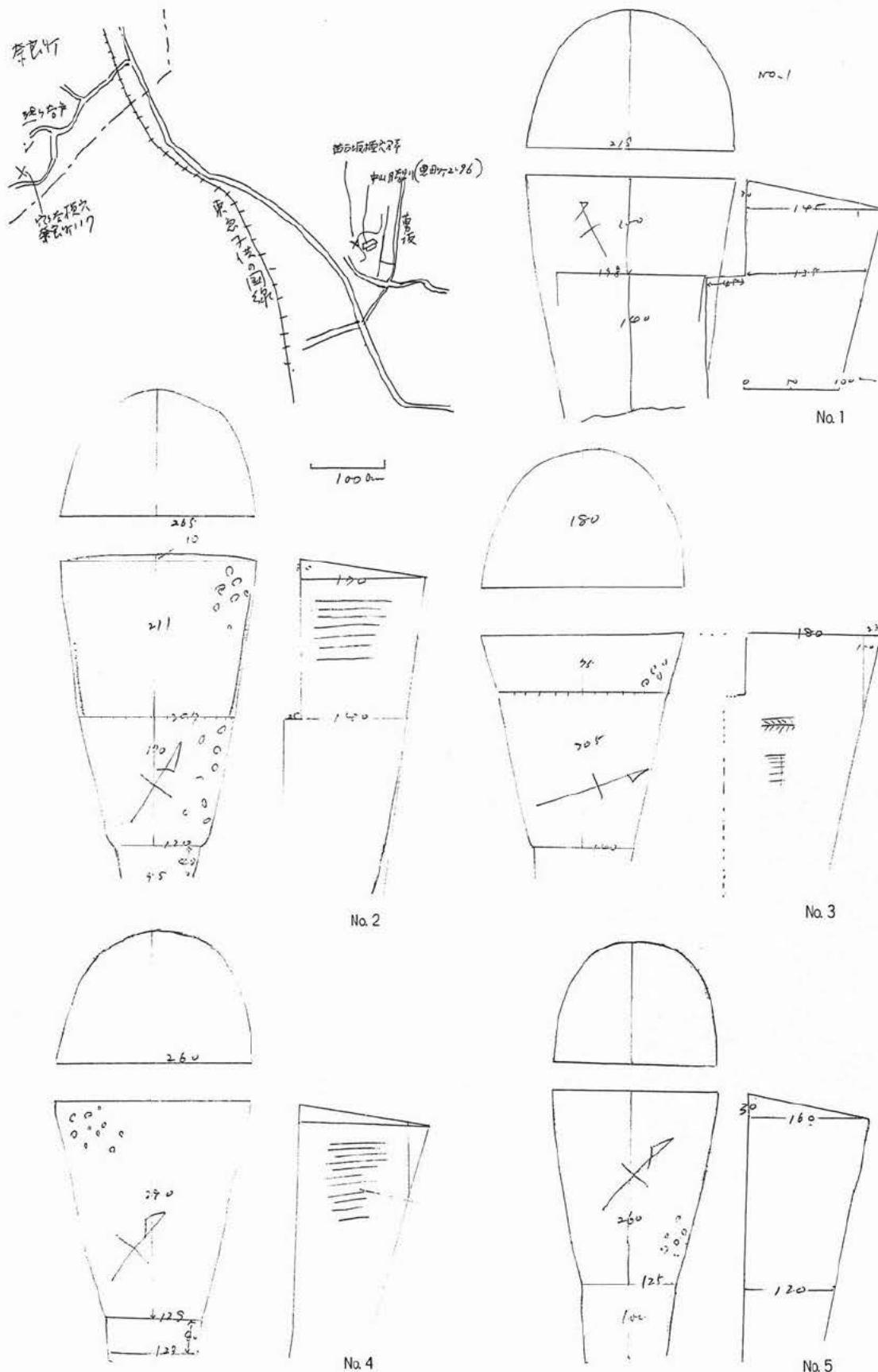
No.5は、No.4とほぼ同様のタイプの横穴墓で、棺座を有さず側壁に肋状の削痕が少し認められ、右側壁寄りに若干の礫が敷かれていたようである。壁左上に丹が少々残るとの記載あり。

以上が5基の横穴墓の概略である。総体的にごく普遍的な終末期の横穴墓であることが判る。遺物に関しては、走り書きに「どの穴からか直刀がでたとつたえる」との記載がある。これといった特徴のない横穴墓群であるが、No.3の線刻が注目される。留意すべきことは、すべての横穴墓に丹塗りが施されているとの記載である。これは赤星氏の大きな誤りで、壁面に湧出した鉄分を丹塗りと間違えている。こうした誤りは、横浜市緑区の市ヶ尾横穴墓群、三浦市の白山横穴墓、逗子市の山野根谷奥横穴墓群、二宮町の諏訪脇横穴墓群の報告に認められ、すでに消滅し検証することが不可能な横穴墓も存在するが、明らかな誤認であることを指摘しておく。

〔掲載図書〕なし

(上田)

考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（1）



第5図 苗万坂横穴墓群の位置と各横穴墓平面面概略図

年報番号 01104 日吉観音松古墳 横浜市港北区日吉三丁目14付近

1、赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月] 昭和13年

[資料保管場所] 慶應義塾大学 藏

[記載内容概略] 三田史学会員による発掘調査に赤星氏が随行した際、出土遺物の一部を記録したものと思われる。内行花文鏡、碧玉製紡錘車、銅鏡、勾玉、管玉、算盤玉、ガラス小玉などの簡略なスケッチと写真のみ。古墳の外形・内部構造等の記述はない。

2、記載資料の整理

[遺跡及び遺物概要] 4～5世紀、台地の先端に造営された長径約90mの前方後円墳。主体部は粘土槨で、それと並行して設けられた粗末な粘土槨は陪葬か。出土遺物は内行花文鏡1、碧玉製紡錘車3、銅鏡3、鉄斧頭1、直刀1、硬玉製勾玉1、勾玉4、管玉10余、算盤玉1、ガラス小玉若干。内行花文鏡はごく初期の製品。碧玉製紡錘車・銅鏡は関東地方での出土が比較的少ない。いずれも大和政権との関係をうかがわせる副葬品ではある。当時多摩川・鶴見川流域を支配した豪族の墳墓と考えられる。

[掲載図書] 横浜市 1958 『横浜市史』第1巻

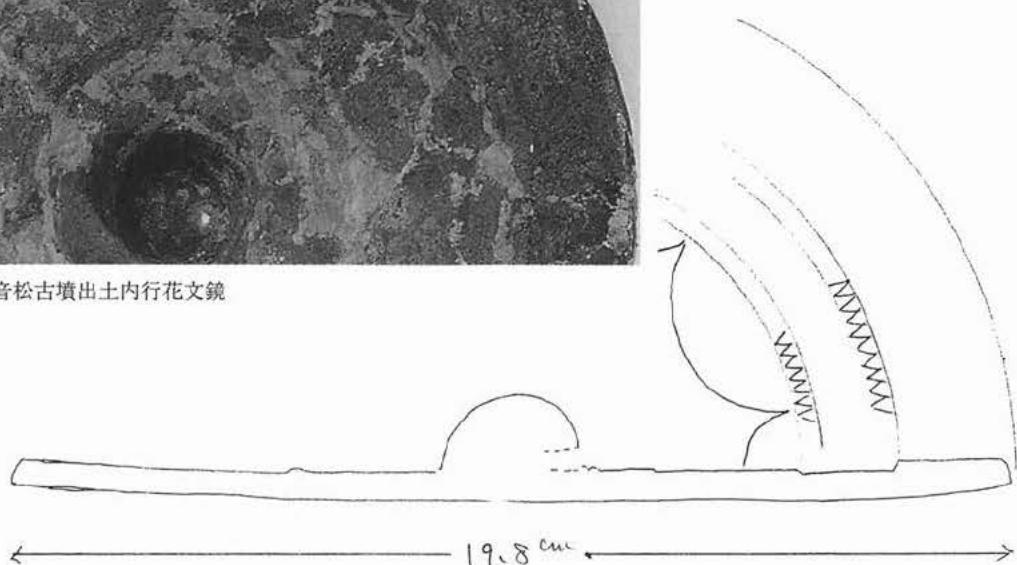
神奈川県県民部県史編纂室 1979 『神奈川県史』資料編20 考古資料

[掲載図書概略] 『神奈川県史』に遺跡解説と遺物の図版が、『横浜市史』に観音松古墳を含む多摩川・鶴見川流域の古墳(時代)の概説がある。

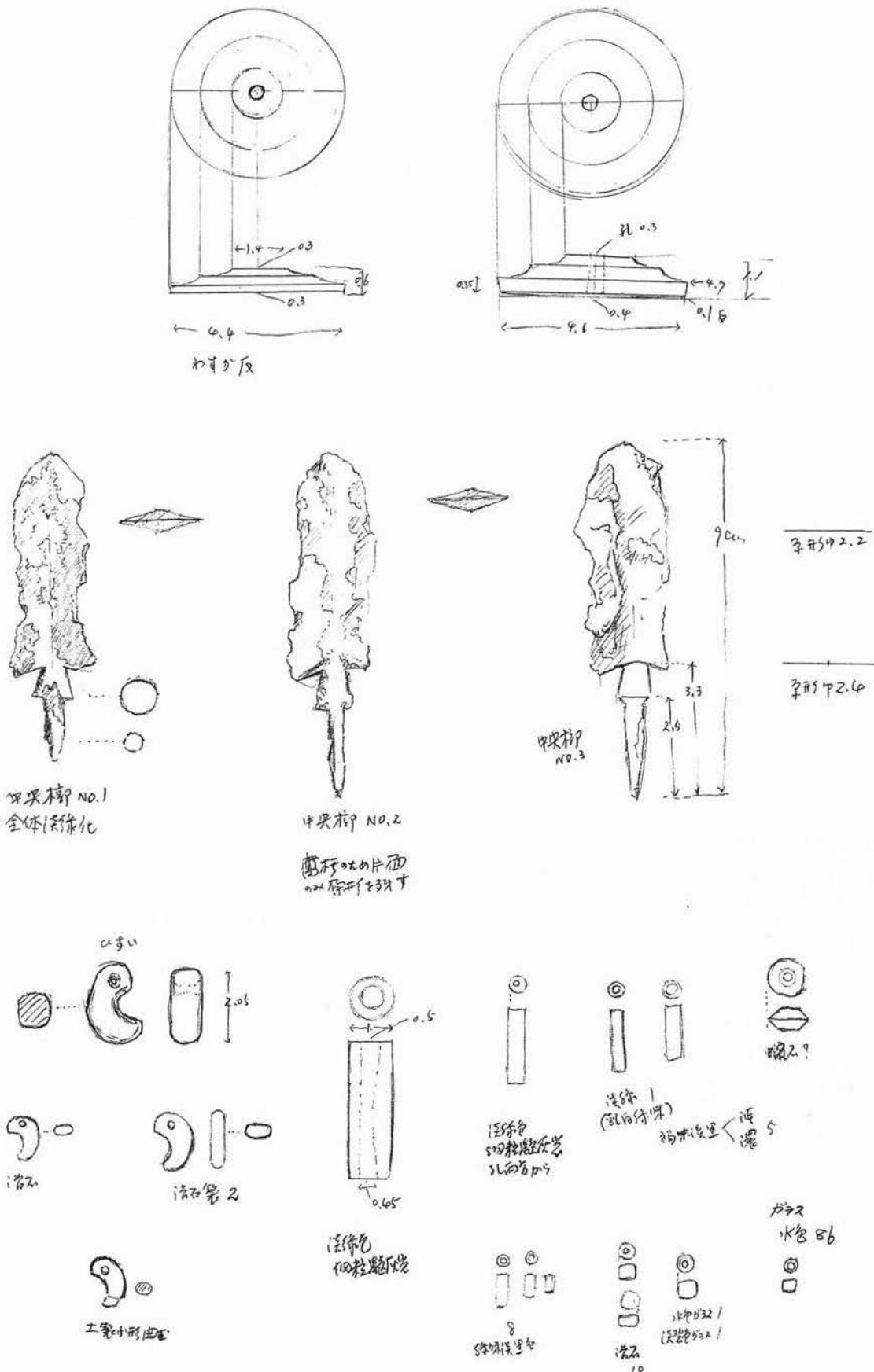
(谷)



写真3 観音松古墳出土内行花文鏡



第6図 観音松古墳出土内行花文鏡平・断面図



第7図 観音松古墳出土遺物



写真4 観音松古墳出土石製品類



写真5 観音松古墳出土銅鏡

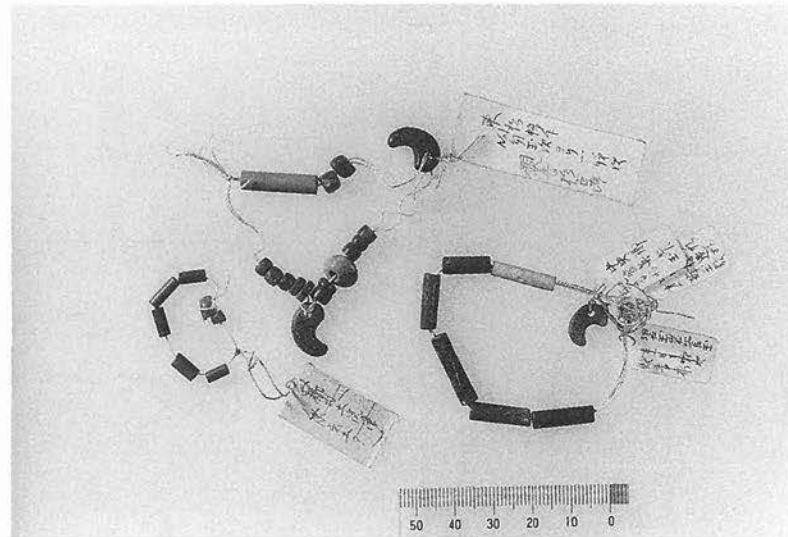


写真6 観音松古墳出土装身具類（その1）

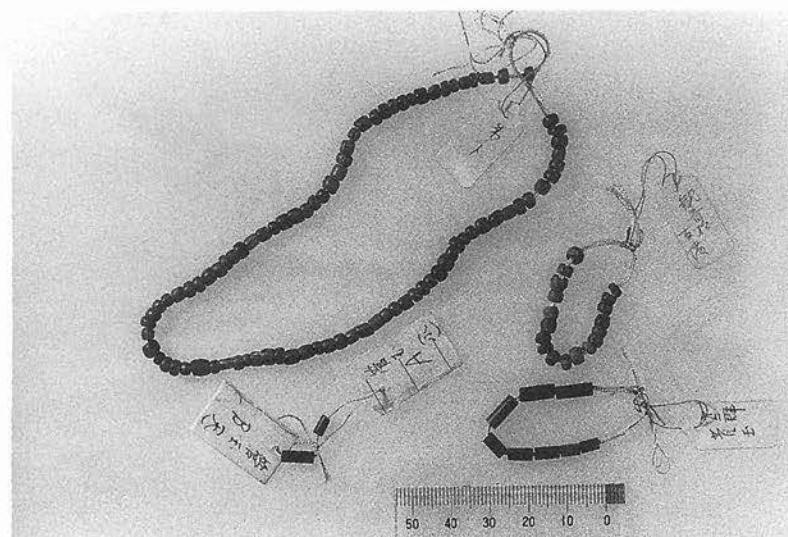


写真7 観音松古墳出土装身具類（その2）